

「木を見て森を見ず」のないように



杉本正実

新光オーエムシー株式会社
代表取締役

1948年東京雑司が谷生まれ。慶應義塾志木高校、慶應義塾大学経済学部卒業、同大学院経済学研究科修士課程修了。専攻は経済政策、開発経済学。1982年公認会計士登録、新光（現中央青山）監査法人、SHINKO & LEUNG CONSULTANTS, LTD.（香港）、海外経済協力基金業務1部2課を経て現在、新光オーエムシー株式会社代表取締役。

私は1984年の1月から3年間、当時のOECF（現JBIC：国際協力銀行）に出向してインドネシアへの直接借款業務に携わって以来、現在まで一貫してODAの世界を歩いてきました。

慶應義塾大学大学院時代には、当時より南北問題の権威といわれた故山本登教授の下で途上国の開発問題を研究し、現在同分野でそれぞれ一流の業績をあげておられる渡辺利夫 拓殖大学国際開発学部長（東工大名誉教授）、高梨和紘 慶應義塾大学経済学部教授、小島眞 拓殖大学国際開発学部アジア太平洋学科長の諸先輩とは、大学院合宿などで文字通り「同じ釜の飯を食った」仲にあります。

ODAによる途上国開発のなかで“*Institutional Development*”の分野を追い求めて17年、ひょんなことから先輩である高梨教授の慶大でのゼミ指導のお手伝いをさせていただくことになりました。同ゼミは途上国への研究旅行を課すユニークな内容を持っており経済学部でも人気ゼミの一つです。指導にあたって私が後輩諸君にぜひとも体験してもらいたかったことが2点あります。一つは途上国現場でのカルチャー・ショック

を伴う「感動」であり、またそのなかで形成される仲間同士の「連帯感」です。途上国社会の実態見聞、そこでの人びととの出会いと話し合い、また研究調査過程での仲間との共通目標に向かっての真剣な議論には、ケータイやメールを介さないフェイス・トゥ・フェイスのぶつかりあいがあります。それらから伝わる躍動感や感動ほど貴重なものではありません。

また、私が彼らに養ってもらったものは、「木を見て木を見ず、木を見て森を見ず」といったことのない総合的かつ双方向的な思考方法です。

昨年度から継続して主に農民を対象とする「マイクロ・ファイナンス」をゼミの共通テーマに取り上げて複数の途上国での研究調査を実施していますが、そこでの私からのメッセージは三つ、第一に「国の開発政策

（森）」という大きな枠組みのなかでの「マイクロ・ファイナンス（木）」といった位置づけ、第二に「農業生産性の増大（森）」をサポートする一側面としての「マイクロ・ファイナンス（木）」といった視点、そして最後に経済学部のゼミとして、「経済学」の分析用具を用いた物事の分析と判断です。

しかし、実はこれらはわれわれ途上国開発に関与する者にとって、もっとも欠けている点なのではないかと感じています。三番目の点は自らの持つ専門性を発揮するということですが、ともすると手段としてのそれが目的と化し、本来の目的であるべき「開発」といった「森」を見ずして、目の前の個別問題（木）に対処する、といった傾向に陥りがちではないでしょうか。

慶應義塾では先生も学生もみんな「君」付けで呼ぶ、というユニークな習慣があります。これは、「先生は福沢諭吉一人。あとは先に学んだ者が後輩を指導する」といった「義塾」の精神に基づくものだということを聞いたことがあります。先日、ふと気がついたのは、知らぬうちにそれを実践している自分の姿でした。

（関連記事P.52～57）